

会議録（要旨）

| | | | | | | |
|-------------------|--|---------------------------|---|---------------------------|---------------------------|---|
| 会議名 | 令和6年度 野村胡堂・あらえびす記念館運営審議会 | | | | | |
| 開催日時 | 令和6年6月28日（金）14時00分～15時20分 | | | | | |
| 開催場所 | 野村胡堂・あらえびす記念館ホール | | | | | |
| 審議会次第 | <p>辞令交付</p> <p>1 開会</p> <p>2 挨拶（町長）</p> <p>3 職員紹介</p> <p>4 会長互選</p> <p>5 報告事項</p> <p>（1） 令和5年度事業報告について</p> <p>（2） 省エネ診断結果について</p> <p>6 審議事項</p> <p>（1） 令和6年度事業計画について</p> <p>（2） 開館30周年記念事業（案）について</p> <p>7 その他</p> <p>8 閉会</p> <p>企画展見学、レコード鑑賞</p> | | | | | |
| 運営委員出欠状況 | 会長 | 江藤 <small>ひでいち</small> 秀一 | 出 | 委員 | 住川 <small>みどり</small> 碧 | 出 |
| | 委員 | 杉本 <small>つとむ</small> 勉 | 出 | 委員 | 山際 <small>まさゆき</small> 正之 | 出 |
| | 委員 | 鈴木 <small>ふみひこ</small> 文彦 | 出 | | | |
| 紫波町 | 町長 熊谷 泉 | | | 副町長 藤原 博視 | | |
| | 教育長 佐美 淳 | | | 教育部長 葛 博之 | | |
| | 生涯学習課長 須川 範一 | | | 歴史文化係長 岩館 岳 | | |
| | | | | | | |
| 指定管理者 （記念館協力会） | 野村胡堂・あらえびす記念館協力会 理事長 野村 晴一 | | | 野村胡堂・あらえびす記念館 館長 岩崎 雅司 | | |
| | 野村胡堂・あらえびす記念館協力会 常務理事（記念館事務局長） 長澤 成喜 | | | | | |

進行（生涯学習課長）

1 開会

2 挨拶（町長）

ただいま辞令書を交付した。運営委員を引き受けていただき感謝申し上げます。コロナ後、昨年からの事業が再開されてきた。いろいろな方が楽しみに来館している。令和7年度、開館30周年を迎え記念事業を企画している。ぜひ忌憚のないご意見をいただきたい。

3 委員・職員紹介

4 会長互選

江藤委員を選出

5 報告事項

<事務局> 「令和5年度事業報告について」を説明

<山際委員> 入館者数、令和3年度に比べて若干増えている。しかし、入館料は令和3年度よりも少なくなっている。収入合計が減っているというのは施設使用料が減っているということか。

<事務局> コロナ禍であった令和3年度と比べても減額となっている。入館者数自体は増えているが、有料入館者数の減少によるもの。学校支援プログラム等も実施しているが減免している。今後の課題の一つと認識している。

<山際委員> 入館者数を年度毎に見ていくと、平成23～24年度頃から8,000人前後を推移しており、コロナの時期を除けば安定している。どこからの来場が多いか。

<事務局> どこから来たかについては、アンケート等で情報収集を行ってはいないため、把握していない状況。会話等から知り得た範囲では日本全国から来ている模様。

<山際委員> 今後も8,000人前後の来館者を想定していくイメージか。

<事務局> できれば10,000人前後を目指していきたいが、現実的などころとしては8,000人を維持したいと考えている。

<山際委員> 思うに、地元の方だけで8,000人というのは難しいと思う。地元の方は、施設の存在を認識していてもそう何度も来るものではない。とすると、地域外の方がある程度来ていて8,000人を維持できると思う。そうだとすれば、地域外の来館者を増やす手立てが他にあるのではないかと思いつている。

<事務局> 仰るとおりと思う。町外、県外に向けてのアプローチ、発信の仕方について検討してまいりたい。

<山際委員> 今後の来館者に対して、どこから来たかを調べるのは難しいかもしれないが、対策するためにも調べて把握してほしい。

<事務局> 承知した。

<鈴木委員> レコードコンサートなどを定期的に開催している点が、他の文学館と比較しても安定した来館者数を保っている理由だと思う。力を入れている児童生徒や学生向けの事業だが、社会の趨勢からすると人数は減っている状況の中で進めていて感心している。読書、音楽感想文コンクールの中身を見ていると皆さん一所懸命書いている。それに対して丁寧にコメントをつけている。がんばっているなど感じる。鶴岡の藤沢周平記念館の運営委員をしているが、あちらは市の中心部にある。鶴岡市内の学生など、なるべく近くの方々に来てもらおうと工夫している。記念館の平成21年、22年頃の入館者は9,000人だが、入館料収入は今の倍くらいの数値となっている。そこは驚いた。このままではなく、アイデアや策を駆使して、もう少し入館者数を増やす努力をしてほしい。

<事務局> 検討する。

<会長> どこも少子化で困っているが、この地域の人口の状況はどうか。少子化の進行などを勘案して、地域外からの入館者を考える必要があると思うが。

<教育長> 紫波町は約33,000人の人口で微増微減を繰り返している。近年、赤石地区の宅地開発が盛んで子供の数はさほど減っていない状況。近年、記念館には施設見学だけでなく、子供たちの音楽との関わりや発信に尽力いただいている。入場料は取れないが、大人になってからのリピー

- ター、価値をわかって再び集ってくれることを期待して事業を進めている。町民ももっとここに来てくれるよう工夫は必要。この状況はしばらく続くと思う。
- <会長> 承知した。次に省エネ診断結果について報告をお願いする。
- <事務局> 「省エネ診断結果について」を説明
- <住川委員> 宅地開発の地域はどの辺りか。
- <事務局> 北上川を挟んで西側の赤石地区で宅地化が進んでいる。
- <住川委員> 人口を増やすための方策か。若い層に買ってもらっているのか。
- <事務局> 比較的若い世代が購入している。児童生徒が増えている。
- <住川委員> ヨーロッパでは「1ユーロハウス」という事業で、古い家を若者に1ユーロで与え、高齢化した地域の活性化を図っている。廃屋を手入れし、若い方を誘い込むとよいのではないか。東京への一極集中が進んでいるが、自然に囲まれて暮らしたいという人もあるかもしれない。
- <副町長> 紫波町では200㎡の戸建て土地付きで3000万円程度。都内と比べると非常に安価。断熱にも力を入れている。空き家について、相続の手続きが進んでおらず、相続者を探すのに非常に苦労している。野生鳥獣の住み処や樹木の繁茂が問題となるケースが増えている。空き家バンクもやっているが、登録してくれているのは希なケース。登記を完了し販売できる状況を作るのが大変。今後、空き物件の利活用がこれからの町づくりの課題となっている。
- <住川委員> 世界中で高齢化が問題となっているが、紫波町の状況はどうか。
- <副町長> 私の住んでいる地域は60世帯の内、空き家が5~6軒ある。80歳以上の一人暮らしや夫婦の割合が3割くらい。子供たちが戻ってきてくれればいいとは思いますが現実的には難しい状況。
- <住川委員> シェアハウスなど新しい生活様式も増えている。
- <副町長> シェアハウスに可能性があるのは東北本線や国道4号沿いの市街地。農村部は田舎に興味のある人に無料でもいいから利用してもらおうなど、工夫して行かなければならないと思っている。
- <住川委員> サラリーマンは無理かもしれないが過疎地でもできる仕事があると思う。
- <副町長> 「小さな農地でもいい、緑に触れたい」という若い人が時々お見えになる。
- <鈴木委員> 宅地造成は盛岡のベッドタウンという位置づけか。
- <副町長> 紫波町は交通ラッシュがない。岩手県の真ん中にあり、奥州市から盛岡市あたりまで通勤圏内。希に一関まで通っている人もある。非常に利便性があるので、教員や警察官、県職員、民間でも転勤のある人たちが住みやすい地理的条件があるため、宅地が増えていると思う。
- <教育長> 交通の利便性を活かし、記念館にも来館者を呼び込みたいと考えている。
- <会長> 省エネ化についてはこれから行う事業か。
- <事務局> 記載内容の内、LED化については令和5年度に完了した。その他の事業について今後、財政状況を踏まえながら設置を検討していく。費用については概算の数値。

6 審議事項

- <事務局> 「令和6年度事業計画について」「開館30周年記念事業(案)について」説明
- <鈴木委員> 開館の頃のことをご存じの方は何人くらい存命か。リストなどあれば知りたい。私は途中から関わっているので、建築なども含め開館の頃のことは興味がある。
- <山際委員> 実際の設計に携わった近畿大学の工藤先生などは今でも連絡をとっているものか。
- <事務局> 連絡は取っていない。リストについてはこれからの予定なのでぜひご意見をお寄せいただき、充実したものしたい。
- <鈴木委員> これまでも20周年記念誌のようなものはあったか。
- <事務局> 記念誌はこれまで作ったことはない。20周年のときは書籍を作った。30周年は一つの節目でもありこれを機にまとめた。また、町としても紫波町史の現代編を編さんしている。記念館の開館は町史の中にも位置づけられる事柄。記念誌と町史、関連させながら進めていきたい。
- <鈴木委員> 開館した時のことはもちろん、小澤征爾さんが来たことなど、あらゆる情報を入れ込んで記念誌を作ってはどうか。
- <教育長> 野村晴一理事長が大変詳しいので話を伺いながら進めたい。
- <会長> 杉本委員が館長をしていたときは、20周年等はどうかだったか。
- <杉本委員> 20周年のときは直接的には関わっていない。堂子会の会員として個人的にお手伝いさせてもらっていた。30周年に向けて、堂子会で開館時に記念植樹したケヤキの草取りとネームプレートの手入れをしたいと思っている。元審議会委員の太田愛人先生とは個人的に連絡を取り合っていた。昨年も話したが、膨大な蔵書を処分したいと申出があった。なかなか行き先が見つからない状況。岩手県立図書館でも受け入れできない模様。重要な書籍や資料があると思うので、今年の秋までに太田先生の自宅へ行ってこようと考えている。

- <鈴木委員> たしかに開館の時の資料などがあるかもしれない。
- <杉本委員> すばらしい人脈もお持ちだった。我々の知らない情報や裏付けとなる手紙などをお持ちの可能性も多分にある。お元気な内にお会いしたいと個人的に考えている。
- <会長> 町の方でも情報を共有しながら進めて欲しい。記念誌の目次などはこれからだと思う。掲載内容について委員から提案などあれば。
- <鈴木委員> 来年の審議会のときに意見を募るのでは間に合わないと思う。掲載目次案などが決まったら委員に共有してもらい追加内容などを提案する機会があれば良いと思う。目次案がないとなかなか意見は出しづらい。
- <教育長> 目次も含めて体裁はまだ決まっていない。審議会後、なるべく早々に構成・目次を示し、ご意見をいただく時間を設けたいと思う。
- <会長> 誰に向けて、どう配るのか。どのように次の入館者につなげていくのかが大事と思う。学校の記念誌は割と作りっぱなし。それが生徒募集や学生募集にあまりつながっていかないケースがある。小学生に配って、なぜこの施設ができたのか、どんな人が関わったのかが伝われば記念館に興味を持つきっかけになるのではないかと思う。記念誌をどう使うかを考えて欲しい。
- <教育長> ハードの 30 周年というよりも、野村胡堂をさらに顕彰していくための節目だと考えている。子供たちなどこれからの人々を対象として進めていきたい。
- <杉本委員> 記念館を建設するに当たって地元の方はもちろんだが、胡堂の娘婿で住川委員のお父様の松田智雄先生がかなりご尽力された。岳父である胡堂の遺志を継ぎながらの活動された。野村学芸財団を設立し、記念館開館が一つの集大成。学者としての生き方と記念館建設までの足跡は考慮に入れながら考えていく必要がある。
- <住川委員> 山際委員のお父様は日銀の総裁だった。現職中も野村学芸財団の理事会だけは出てらした。一番忙しい方が情熱を持って関わっていた。胡堂は 74 歳で白内障の手術をした。当時の手術なのでさほど改善せず、転んで大腿骨を骨折して車椅子になった。執筆に対するエネルギーがなくなってしまった。山際委員のお父様はじめ、周囲の人々に大変お世話になったと思う。父(松田智雄)もそういった人たちにいろんな意味で恩返ししたいとやったことだと思う。
- <杉本委員> 山際委員のお父様の前の日銀総裁だった渋沢敬三は、短い間だったが野村学芸財団設立時代の顧問だった。その後亡くなられた。渋沢敬三の祖父、渋沢栄一が一万円札の肖像となるのも一つの縁。発信する機会だと思う。
- <会長> 記念誌の件、内容は大きく二つに分けられる。今回は建物の開館 30 周年ではあるが、野村胡堂にも光を当てる必要があるし、なぜこの施設ができたのか、どんな人物が関わってきたのか、人の動きが描ける。野村胡堂についても、作家、音楽評論家と共に野村学芸財団の設立と 3 つの顔が見えてくる。もう一つは、建物がどういういきさつでどのようにつくられ、それがどんな 30 年を歩んできたのか。流れを追いながら記録として残していく。最後に今後の展望が入ってくると思う。少しずつ関係者の方々から聞き取りをしていただければ資料もたくさん集まってくると思う。時間も無いので積極的に進めていってほしいと思う。
- <教育長> 参考にしながら進めたい。
- <会長> 私が初めて記念館に訪れたのは、野村学芸財団で 1 泊の遠足を企画したときだった。詳細は覚えていないが、野村前館長宅も訪れた。そのとき非常に良いところなんだと知った。
- <山際委員> あれは平成 13 年か 14 年だった。今、野村学芸財団の事務局をやっている吉野氏が、当時「湘南モーツァルト会」というのを主催していた。そのメンバーの中から「野村胡堂の記念館ができたのでぜひ行きたい」と話題が上がり、記念館に関わっていた私に話がありご案内した。
- <会長> そば屋で食事したり、鮭が上る川を案内してもらった記憶がある。
- <杉本委員> 当時城南小に勤務していたので私が市内を案内した。
- <会長> このときの遠足のように堂子会を通じて野村学芸財団に 30 周年事業の案内をもらえればクチコミで広がっていくと思う。
- <会長> 審議会で提案した事業の内、販売書籍の web 掲載だが、売上げはいかがか。
- <事務局> 公開からそれほど期間が経っていないが、一定の効果があったのではないかと思う。
- <会長> いろいろな形で収入を確保していくのも必要だと思う。Web サイトの訪問者も気になるところ。先ほどの入館者の記録と共に分析してほしい。

7 その他

- <教育長> 「岡堂コレクション」という SP レコードのコレクション、「宮城谷コレクション」という 3000 枚の CD コレクションなど、少しずつ活用し始めている。記念館が音源の「終の住処」となっている。キャパの問題はあるが、とても嬉しいこと。紹介になるが、山際委員からも私物のレ

コードやCDを寄贈したいとの申し出をいただいている。学術的にも良いことだと思う。一層進めてまいりたい。よろしく願います。

<杉本委員> 胡堂・あらえびす大賞だがレベルが上がったように感じる。学校での指導もさることながら、記念館との関わり方も向上につながっていると思う。嬉しく思う。

<教育長> 指導の中身が作文の中身にもつながっている。

<会長> 歴代の作文をCD-ROMにして30周年記念誌に添付すれば、書いた子供たちの記念にもなるし、それがまた次の世代の刺激につながる。

8 閉会